神奈川新聞社主催、ネクスコ東日本、ネクスコ中日本協賛

「道の作文コンクール2019」

受賞作品

中学生の部

中学生 県知事賞

思いが一つに

聖園女学院中学校1年　田中　結菜

「じゃあ、いってきます。寒いから風邪引かないように気をつけてね。」

楽しかった週末はあっという間に終わってしまった。今日姉は家よりももっと寒い町にある寮へ帰っていく。この春から始まった何度目かの光景。姉は祖母の手を、祖母は姉の手をとってしばしの別れを惜しんでいる。

「どうせ、またすぐ帰ってくるのに。変なの。」

しまった。心の中におさまらず、口からこぼれてしまった私の声。

「近くにいると、見えないものってあるんだよ。遠くから見えるものもある。」

私の右を向いて、ちょっと真面目な顔をした姉が言った。

そしていつもの顔に戻って

「まぁ、結菜にはまだわからないかなぁ。」

といたずらっぽく笑った。

「お姉さんぶっちゃって。本当なんだかよく分からない。」

私のほっぺがふくらみかけたけれど、私も姉を送っていくことにした。父の運転する車に乗り込む。

外は夜の幕が下り始め、ポツリポツリと車のライトが点き始めた。キラキラ輝き、とてもきれいだ。

そして幕が完全に下りるころ、連なった光たちは長く続くネックレスになる。私たちの行く先にはテイルランプ。

私は高速道路で出会うこの光景を見るのが好きだ。そして、私の横を「ひゅん」

音を伴って追い越していく車から、乗っている人やその車の中の物語を想像するのだ。

ふと、考える。私たちが乗るこの車のお話は。一つの家族が、しばらくの別れに向かって走る車。でもそこには悲しみとか暗い雰囲気はない。今のご時世、私たちは離れていてもスマホやネット、色んな手段で繋がることができるから。

では、姉がわざわざ家族の顔を見に帰ってくるのはなぜ。「忙しい」と言いながらいそいそと車を出す父。どうして。大型連休、高速道路に何十キロもの渋滞をつくりながらもふるさとを目指す人の気持ちは。

姉が言いたかったことはここにあるのかもしれない。機械越しより、そばで笑い合えるほうが、何百倍もいいに決まっている。長い距離を超えて高速道路は私たち家族を繋いでいた。

今、家の中に姉の姿はない。一緒に笑ったりケンカしたりすることはできないけれど、いつも繋がっている。私も気づくことができた。

今日も高速道路では色んな思いを乗せた光が遠くの町まで流れていく。

日本のあちこちに咲いたみんなの笑顔の花を高速道路は一つに繋いでくれているのであろう。

2020年（令和２年）３月30日　月曜日　８面・９面　企画特集より

※神奈川新聞社に無断で転載することを禁じます。